

教育、教育と騒ぐな

田中　ところで、学問の問題がちょっと出たんですけれど、これからの文化、教育、社会問題などについて、お話をお願いしたいんです。今、日本ではいわれているほどの学歴による差別は意外にない。特に政界はないと言われましたが、世間一般をみていると、やはり、よい会社に入るためには、よい学校を出なければいかんということ、中学、高校、大学と、受験、受験できている。これはもう、日本の社会の非常に大きな問題だろうと思う。これは世の中自体を直さなくては、とても直らない問題かもしれないけれど、教育制度、教育のあり方ということについて、私はこれからは経済よりも、むしろこういふ問題の方が遙かに大きな、政府にとっても大問題だろうと思うのです。そこで大平さんの教育論をお尋ねしたいのですが。

大平　少し教育に手数をかけすぎているのではないか。教育というのはもう少し、リベラルであっていいように思う。私は教育の素人ですが、もともと教育というものは、人間の本性に備わった潜在的な能力を引き出すことではないでしょうか。つ

まり、それは本人にやる気を起こさせることだろうと思うんです。そこで、そういうことは立派な学校を建ててみたり、いろんなカリキュラムを多彩に作ってみたり、教育予算をたくさんとったりすることだけでできるかというところ、そういう問題ではないんじゃないかと思っています。学校教育も社会教育も家庭教育も、その本人がやる気を起こすようにみんなで考えたらいい。あんまり教育、教育といつて、肩が凝るような議論が多くなっていくように思う。

田中 まあ、教育ママといつて、お母さん方が大へん熱心なんです。

大平 私も大蔵大臣をやっておつたとき、よく教育予算を頼まれて、うんざりしました。予算をたくさん出せば、それが教育のためになると思うようだけれども、私にはどうもそうは思えない。つまり、お金をつけてやれば、それはあるいは先生のためであるかもしれないし、学校経営者のためであるかもしれないが、子どもとどういった関係があるのだろうか。講師が助教になる。また助教が教授になったからといって、学問がそれでそんなに進歩するわけでもない。それから研究所にしても、戦時中は勝つためには何でも作る。もう時局便乗型が多かった。戦後もまた民主主義だ、平

和だといって、いろんなことをやってきた。やはり、教育というのは、原点に帰って人間の能力を引き出すことなんだから、そこに力点を置いてもらいたい。西郷南洲とか、吉田松陰とかという人物は、輪奐りんかんの美の中から生まれた人ではなかったが、若くして後世の日本に、絶大な指導力と影響力を持っています。

田中 青二才のような若僧に教えられている。

大平 吉田松陰の松下村塾というのは、そんなに輪奐の美を誇る近代教育の施設があつたわけじゃない。しかし、そこから多くの有為の人材が出た。だから教育というもの、私はあまり勿体ぶらんようなものにしてもらいたいと思う。

昭和元禄は観念論

田中 同感ですね、これは。つぎに一つ、最近のいろいろな世相なんです、まあ今は、昭和元禄といわれている。福田さんなんか昭和元禄というようなことを言っている。かなり長い間平和が続き、天下泰平ということで、いまの世の中全体が非常

に女性化しているという見方をする人もいます。男性的な価値観が失われている。たとえば勇氣とか、決断とか。そういうものがなくなり、それにかわって妥協とか、調和とか、話合いとかいうようなことが叫ばれている。まあ、それはそれで非常に結構なんだけれど、どうも一本、たががゆるんでいるんじゃないかというような見方もできる。これはその人の考え方によって、いろいろ評価も違うと思いますが、最近の世相、昭和元祿といわれるような今の世相について、率直な意見をお聞きたい。

大平 いまの世の中、果たして昭和元祿だろうか。私は日本人の性格は、そんなにぜいたくで情弱であるとは思いません。どちらかというと質実な方じゃないんです。うか。そんなにぜいたくで、浮薄軽佻に流れておるとは思いません。そりゃ昔よりは生活が便利になり、また車を持っている人が多くなり、きれいな家に住み、第一、洋服なんかもござっぱりときれいになった。しかしそれは、昭和元祿というものではないのではないか。時代がそういうふうに進んできたにすぎないのではないかと思う。ただ、これでいいと思ってもしけないと思う。やはり原点に帰ると、今の生活程度をどうして維持するかが、大へんむずかしいことになったと先程言ったが、そういう意

味からいって、これを維持することにむずかしい条件が出てきた以上、われわれはそれに生活を適応させていかなばならない。電力や水道、ガスやガソリンにしても、われわれがいま使用しているものを、場合によっては落とさなければならぬという事態がこないとは限らぬと思うんです。

そして、私達は、もうエネルギーの節約をやらなければいかん。強制力をもってでも、節約をはじめなければいけない感じがいたします。しかしそれは、今が昭和元禄だからという意味ではなくて、今の生活程度をできるだけ安定的に維持していくためにはどうするかという、別の次元の話です。私は昭和元禄というのは、少し観念論じやないかと思う。感覚的にそういう感じのするところが、あるいは部分的にあるかも知れません。そうだとすると、それはどの時代にもあったことじゃないかという感じがしますね。

ポルノに干渉は無用

田中 それは面白い見方ですね。日本人は決して浮薄軽佻ではないと、これは民族の本性にもつながる問題だと思いますが、それは別として、最近の一つの風潮として、セックス、つまりポルノ解禁の動きが世界的にある。日本でも近頃は、ある意味では大へんなポルノ時代でもあるわけなんです、こういう性の問題についての感想を聞かしてくれませんか。

大平 これは苦手ですねえ。(笑) だんだん性欲が減退してきているし。

この問題は、下手に政治が手をつけちゃいけない問題だと思う。これはまず社会の問題、つまり、まあ家庭の問題、職場の問題、学校の問題です。そういう問題として、それぞれに考え、始末をつけてもらうように仕向けることが肝心のように思います。

田中 そうですか。

大平 政治家にはこうしたらいいとか、ああしたらいいなんていう知恵はない。

田中 ポルノをどうするかは、言論、思想、表現の自由につながることで、国家権

力がそれに介入すべきではないという意見がありますね。しかし、こういう問題は本来国民サイドの方で、社会通念というか、常識というか、その線でもって自主的に規制していくということが、一番いいことだろうと思うのです。

ただ日本の場合は、いまでも性に対するタブーというものが、かなり、根強く残っていると思う。そういう意味で、今は、旧来のタブーがいつべんに崩れ去って、一つの過渡期にあるという感じがします。特にマスコミとの関係でいうと、最近ではテレビなど、かなり、あからさまな性風俗を伝えていきます。婦人団体などはテレビ番組を採点して、「ワースト・テン」などといって、番組を名ざしで批判している。しかし、マスコミの中でも、日本の新聞ぐらいい性に対して保守的な新聞というのはいないんです。世界的にみて。新聞は性やポルノに対しては非常に保守的です。テレビは違いますが。テレビは、夜の十二時過ぎると相当どぎつい番組を流しているが、新聞は、まあそりゃ、一部の新聞はありますけれど、少なくとも一般的な新聞の場合は性については臆病なほど保守的のといってよい。しかしこれは、大へんむずかしい問題ですから。(笑)

言論の自由は国是

田中 つぎにマスコミについてお聞きしたいんですが、テレビ、新聞を中心として、現在の日本はある意味でマスコミ王国といってよい。政治とマスコミ、あるいは政治家とマスコミとの関係ですが、政治家にとってマスコミというのは、ある場合は敵であるし、厄介な存在であるが、同時に、ある場合には味方でもある。両者の関係というのは、私は非常に微妙なものがあると思うんです。そこで今の日本の、マスコミのあり方について、政治家の立場から率直なご意見をお尋ねしたい。

大平 フリーダム・オブ・ザ・プレス（言論の自由）、それが守られているということが、日本を支えていると思います。プレスは確かに、われわれにとっては大へん厳しいものであるし、また厄介でもある。しかしフリーダム・オブ・ザ・プレスは、何ものにもかえ難い一つの大事な国是ですから、どんなことがあっても守っていかねばならない。取材の自由、報道の自由というようなことは、どんな犠牲を払ってでも守っていかねばならないものだと思います。

マスコミは、現在、それだけの特権というか、それだけの力を持っている。ある意味では政府以上の力を持っていると思います。そういうマスコミがおこり高ぶっているかという点、私は必ずしもそうは思っていません。マスメディア自体も、やはり適当な競争下にありますし、この頃はまた、雑誌ジャーナリズム、週刊誌ジャーナリズムというものが、相当な力を持つてきましたから、お互いに牽制し合っているようにも思えます。だから、そんなに行き過ぎた権力の濫用が、プレスにあるというようには思いません。ただ強いて言えば、報道のクオリティからいって、もう少し精選された記事、あるいはもつと建設的な提言が欲しいと思います。それだけを心得ておれば、一応社会人としても通用するといった程度のものが欲しい。だからクオリティが大切です。それからあとは気品とか品位が必要でしょう。その点、多少気にかかるところはありますけれども。

田中 新聞はどのくらいお読みになっておりますか。やはり、ほとんどの新聞を読んでいますか。

大平 ほとんど全部取っています。まず見出しを読んで、関係があるところだけ

自身の記事を読んでいる。だから全部が全部、読んではいません。

田中 それでも相当の時間を新聞にかけているでしょう。

大平 そう、まあ一時間ぐらいでしょうか。

田中 一時間ぐらいですか。見出しをみて、必要なところは少しくわしくみるとい
うわけですか。

大平 そうです。

田中 テレビはいかがですか。

大平 テレビはニュースです。とくに朝のニュースです。

田中 NHKですか。

大平 ええ、朝は必ずニュースをみる。ほかにテレビは娯楽ものをよくみます。

田中 スポーツ番組ですか。

大平 スポーツとか、映画とか、芝居とか。

田中 日曜のNHKの大河ドラマなどはみますか。

大平 ええ。

新聞にももの申す

田中 最近は新聞批判が非常に出てきまして、新聞批判をした本を出すと必ずベストセラーになるといわれているくらいなんです。私など地方を講演でまわることが多いのですが、地方の有識者の間でも、ジャーナリズム批判、とくに新聞に対する批判の声が潜在的にかなりあります。大新聞はけしからんという声です。その理由としては、報道が片寄っている、公正さを欠いている、という理由が多い。しかし、何が公正さかということになると、それぞれの立場によってみんなモノサシが違うわけでしょう。右寄りの人は今の新聞は左がかかっていると言うし、逆に左の人は、今の新聞は保守的であるとか、体制的すぎるとかいつて批判する。政治的、思想的な立場の相違によって批判の内容は違うんですけれども、それなりの不満を持っていることは事実のようですね。そういう意味での新聞批判、マスコミ批判が、今、非常に流行しているんですが、報道の公正さという点について、たとえばご自分の関係した記事もしばしば新聞に出ると思いますけれど、そういうものをお読みになって、新聞は本当に公正に書いていると思えますか。

大平 公正というよりは、物ごとのくだりをすべて書いてくれて、前後のつながりがわかるように書いてもらえたら、自分の言う真意が全部読者にわかるのに、と思うことがしばしばあります。ところが新聞は、その中の一部をとって書くことが多い。

田中 つまみ食いですか。

大平 そうです。読者から見ると、なんだあんなことを言うてるのか、ということになる。しかし新聞は、大体質問に対して答えたものを、たまには間違うことがあるけれど、ほとんどは間違いなく書いてくれます。ただ、その取り上げ方には問題があるように思います。

田中 時間の制約や紙面上の制約があつて、答えてくれたものを全部伝えるわけにはいかない。

大平 書いた記者はきちんと全部書いてくれても、新聞社の整理の方がまた直すんでしょうからね。あれはある意味ではやむを得ないとは思いますが。しかしたとえば、福田さんと私とを対立させないと、記事として絵にならんといふのは困るんだ。

田中 対立的に書かないと、記事として面白くないのですね。

大平 それで、私に言わせれば、幹事長として党務というものがある。党員の獲得、党員の確認、党友の募集、そういうことは、党務なんです。だから、そういう仕事は、いわゆる政争でも何でもありません。ところがそのことを、私と福田さんとの間の政争とみたり、派閥的な行ないであるとみるんです。こうみないと、ちょっと新聞が面白くならないようです。私どもはそれをやらないと商売にならんわけで、党務としてやっているだけなんです。私の派のために党の利益を犠牲にするのであれば、それは派閥的な行動として、糾弾してしかるべきだと思いますが、そうではないんです。そういうものを閥務と言われたんじゃ、立つ瀬がない。

それから解散論にしても、福田さんはこうだ、私はこうだ、などと言うんだが、そしてまあ、いっぺん書いたら話がすむものを、もう大平の方は必ず解散反対ということに仕立ててしまい、福田さんの方は解散推進派に仕立ててしまう。そうしないとストーリーにならない。そこは少し無理があると思います、新聞の書き方にね。それで解散の反対を私がやるという場合に、それは閥務とみる。冗談じゃないですよ。解散は重大な国務ですよ。解散に反対し、あるいは推進する人間がいても当然です。その

ことを、派閥色をつけてしまわないと気がすまないとところに、問題があるわけです。

私どもは、それなりに真剣にやっているつもりです。きざつばく聞こえるかも知れないけれど、私どもにとっては、総理大臣になるかならんかななどということより、もっと大事なことがあると思っています。なりふりかまわず、閣務に血道をあげてまで総理大臣になりたいというほど、野暮ではないつもりです。しかし新聞は、私の全行動は、総理大臣になることにすべてを賭けているように書いてしまう傾きがある。まったく総理大臣病です。私は日本の総理大臣が、そんな偉いものだと思っと思っています。どうしてもならなければとも思っと思っています。それを何で、そういうふうに抽象化して、戯画化して、新聞は書くのかね。

田中 政治家一般に対する先入観があるんです。

大平 日本の新聞、雑誌というものすべてに、共通の何かがあるんですかなあ。

田中 おそらく、プレスに対するそういう批判は、なにも政治家だけではなくて財界人にもありますし、各界とも取材される側にはあると思うんです。これを論じていくと、日本の新聞論になり、日本の新聞記者論になり、いくら時間があっても足りなくなる。